



# 虹之介乱れ双

南條 範夫



東 方 社 版

虹之介乱れ夏



(乱丁・落丁の場合はお取替え致します)

昭和三十六年十一月二十日発行

定価二九〇円

著者 南條 範 夫

発行者 石渡 磨 須 子

整版者 内田 柳 次 郎

東京都文京区高田豊川町六〇番地

発 行 所 東 方 社

電話大塚(掛)一八七三番  
振替東京五七七四番

(印刷・邦文堂印刷所)

長篇時代小説

虹之介乱れ刃

南  
條  
範  
夫

長篇 虹之介乱れ刃

兵 六 奮 然  
閃 ぐ 懐 劍  
そ の 翌 朝  
兵 六 の 推 理  
夢 之 丞 登 場  
道 場 荒 ら し  
風 心 流 の 細 太 刀  
女 劍 士 の 秘 密  
留 守 中 の 椿 事  
奇 妙 な 姉 弟  
闇 に 閃 ぐ 劍  
長 屋 勢 奮 戦  
若 君 さ ら わ る

79 73 67 61 54 48 42 35 29 24 17 10 5

家老陰謀  
瓜 二 一 つ  
平林寺の法要  
八方乱れ斬り  
奇怪な亀丸君  
兵六これを持って  
悪党密謀  
真弓受難  
兵六活躍  
奇怪な下屋敷  
伝鬼待ち伏せ  
秘密の出口  
狐と狸  
行手の白刃

163 157 151 145 140 133 127 121 116 111 102 98 90 86

黒川伝鬼の企み  
八方乱れ構え  
夢之丞の秘密  
亀丸の脱出  
相寄る二人  
三本の榎  
仇敵斃る  
逆臣一掃  
涙の笑顔  
竹光浪人  
珊瑚かんざし

装幀  
御  
正

伸

261 223 216 210 204 199 192 187 182 176 170

## 兵六奮然

まだ、やつと、戌の刻（午前八時）を少し回つたばかり。

両側に、長く、どこかの大名の下屋敷の塀がつづいて、塀を越えて枝を伸ばした葉桜の中に、二つ三つ、咲き残つた花が、かえつてなまめかしく、連子窓から覗く年増女のように、ちらついている。

風も、めつきり暖かく、月は、かすかな朧月、からだ中に回つた五、六合の安酒やすしゆに、心もうきうきうき上機嫌の兵六が、

「爪つまひ弾きの心意気からふとした縁で、今じや人目を忍び駒——」

生来の音痴で、調子外れの声ながら、本人は、結構いい声のつもりで、馴染の切見世女郎の薄べつたい顔でも、頭の隅に思い浮べながら、口ずさみつつ、大川端に出る横道を、ふらりと曲つたとき、

「ありやツ」

と、頭から水でもぶつかけられたように、酔眼を、見張つた。



若い娘が、眼の前を、風のように、突つ走つていったのである。

宵の口のことだ。大川端を、若い娘が、走つていつたからとて、別に大した不思議でもない。

が——兵六が、眼の玉を飛び出すようにむいたのは、その若い娘が、おぼろ月の影にもはつきりと、燃えるように見えた緋縮緬ひちぢもめんの長襦袢一枚という姿だったからだ。

伊達巻いだけまきを、きりつと細腰にしまっていたものの、裾は乱れて、白い脛が、少々見えすぎるぐらい上の方まで見え——その上、何と、素はだしであつた。

——あ、ありや、一体、どうしたつてんだな。

と、鼻先をかすめて去つた女の匂いに、茫然ぼうぜんと、後姿を見送つていると、

「退け、素町人——」

「邪魔だツ、ほかツ」

いきなり、背中を突きとばされ、たツたツと、二、三步前にのめつて、片手を地につき、不恰好に、這いつくばつた。

「てツ、何を、しやがんでえ」

憤然ふんぜんと叫んで、からだを起した時には、七、八人の侍たちが、文字通りおつ取り刀——という様子で、眼の前を走つていった。

長襦袢の娘を、追いかけていることは、疑いない。

「べら棒め、駄三一ども、若え娘を、大ぜいで追いかけてやがつて、どうしようてんだ」

持ち前の義侠心——と言うと大袈裟だが、突き転がされた忌々しさと、江戸ッ子特有の好奇心と、それよりも、若い娘がどうなるかというフェミニスト兵六の本性とから、片裾かたすそはつと捲り上げて走り出していた。

いくら走つても、女の足。

・追う者と、追われる者との距離は、忽ち、縮められ、

「待てッ」

「逃げようとて、無駄だぞッ」

口々に叫んで、追いついた侍たちが、取り囲もうとするのを、川端の柳の幹に、びたりと身を寄せて、立ち止まった娘が、さすがに、息を少し弾ませて、本能的に、はだけた前を合せたが、意外、

「無礼者、許ませぬぞ」

あれーッ、と助けでも呼ぶどころか、透すき徹とほるように、張りのある声で叱りつけると、右手に、きりり——白い懐剣の刃が、光つていたのである。

——美しい女だ。

追いついた兵六が、侍たちの後から、その娘の顔を、正面にみて、呻った。

娘の思いがけぬ行動に驚く前に、

——美しい女だ。

と、思わず呻ったのだから、余つ程、別嬪べっぴんだつたに違いない。

長く垂れた柳の糸を背景に、黒髪くろかみの二筋三筋、額かみに乱れかかる白い顔が、真紅の長襦袢から、抜け出るように浮いて見えるのだ。

——畜生、三さんどもに、勝手な真似をさせて、たまるかい。

兵六は、猛然と、鬪志を湧き起した。

足許の小石を、二つ三つ拾うと、

「やいやい、くそ侍——でつけえ図体した奴らが、大ぜい寄つて、娘つ子を手ごめにしようつてのかい、信州の山奥の峠道じやあるめえし、お江戸の真中じや流行らねえや、いい加減にしゃがれ、こん畜生！」

びしりッ、びしりッ——

突然の罵声ののしりに、ふいと振向いた侍の一人の、頬ほお柎づたに、小石の一つが、したたかに叩きつけられた。

「あつ」

「うぬ、下郎！」

二人の侍が、身を翻して、兵六の方に、追つてきた。

どちらも、刃を抜き放つている。

——いけねえッ。

猛然たる闘志も、刃物の前には、いささかたじろがせざるを得ない。

「盗人！ 人殺し！ 辻斬りッ」

素頓狂な大声でど鳴りつつ、走つた。

こんな事をど鳴つても、誰も助けてくれはしない。かかり合ひになつては大変と、慌てて雨戸にさんを下ろすぐらいがおち。このところ、江戸市民の俠気も、めつきり影が薄くなつている。

それにしても、対手を、いくらか躊躇させるだけの心理的効果はあるだろう。

叫びつつ走つた兵六が、川端の材木を積んだ蔭から、細い路地に飛び込んだ。

このあたりの路は、どぶ鼠よりも、よく知つている。

からだを横にして、狭い板塀の間をすり抜け、通称うなぎ長屋の真中、按摩の久と、羅字屋の甚兵衛が隣り合せの、——いつもは、野良猫の恋の通い路になっているところから、ひよいと、

躍り出た。

転がるように、三軒目の表戸に飛びつき、

「旦那、旦那、親分、先生、大変だつ」

## 閃く懐劍

家賃が月に十八文。

たつた一間だからとて、文句は言えぬ。

その一間の奥に、それでも、感心に、一坪ほど、庭らしいものがついて、手製の柵の上に、浅草の夜店ものらしい鉢が、五つ六つ並んでいる。

片足を草履せうりの上に、片足をぼろ畳の上に、行儀の悪い坐り方をして、あまりうまくもなさそうに、ちびりちびり酒を飲んでいた二十四、五の青年が、ふりむきもせず、

「兵六か、はいれ」

と、答えた。

顔をみなくても、声だけで、いやばたばたと走り込んでくる足音だけで、それと解る仲らしい。

「た、大変だ、旦那、親分、先生」

兵六、草履を一間ほど素つ飛ばして、座敷に飛び込んだ。

「伝八のところ、もう、生れたか」

「てッ、そんなじやねえ、薄汚い餓鬼どころか、ヘッ、緋縮緬の長襦袢だ」

「よせ、よせ、そんな女にお前が惚れたとて、どうせ、無駄だ」

「冗談じやねえ、虹之介旦那、若い武家の娘さんだよ。それも、滅法別嬪ときた、懐剣斜に構え

て、無礼者！ ときた」

「ばかないはずらをしたのだろう」

「あ、あつしじやねえ、悪侍どもが十五、六人、いや、二十七、八人別嬪の娘を掴んで、あわや、

落花狼藉、雪紛々」

「なにッ、悪侍どもが」

きつと、からだを向け直すと、右手が伸びて、傍の大刀を掴んだ。

「そ、そうなんだ、旦那、助けてやつておくんさい」

「どこだ、場処は」

「大川端多聞屋敷の前あたりだ」

よしツと立上ると、開け放しになつていた表口からぱつと飛び出してゆく。

「あれツ、旦那！」

兵六が、慌てて外に飛び出してみると、もう、後姿もみえない。

「いつも、もつそりしているくせに、いざとなつたらまるで隼はやぶさみてえだ」と呆れたが、

「ようし、旦那、心配するな、兵六もあとからゆくぞ」

大きくうなずいて、走り出した。

この時、早くも、川端に出ていた虹之介、兵六に教えられた通り、多聞屋敷の方に向つて、地上をかすめる疾風しつぷうのように、しかも、音も立てずに疾走していたのは、見る人が見れば、神変流早駆けの秘法と悟つたであらう。

「ええい」

「ぐうう」

掛声と、悲鳴と――

虹之介は、ひたと、疾走を止めると、

――これは、

と思わず、驚きの目をみはつた。

押し伏せられているか、引きかつかがれているか、どの途、無惨な姿になつていゝのではないかと、危ぶんでいた娘が、柳を背に、懐剣を、閃かして、毅然きぜんとして、立つていたのだ。

しかも、その懐剣の半ばまで、血に塗れている。

傷ついた男が二人——一人は、立つていられないらしく、地上に、うずくまつていた。

——三和流かな、見事な構えだ。

虹之介は、娘の構えをみてとると、舌を捲いた。

——一通りの修業ではない。若い女の身で、天晴れな。何者か？

すぐに助勢をしなければ、という考えを起させない程、娘の態度は、凜然としていた。

むしろ、狼狽し、躊躇し、態勢の乱れているのは、侍たちの方であるとさえ言える。

「えい、早くせい」

首領らしい一人が、いらいらして叫んだ。

「——と言つて、傷つけては——」

「構わぬ、役人共でも、現われては面倒だ、斬れ、斬れつ」

斬らずに、捕えねばならぬ、ということが、侍たちの思い切つた行動をはばんでいた原因の一



つであつたらしい。

「ようし、斬るぞッ」

一人が、上段にかざした一刀を、娘の右の肩に向けて、

「くたばれッ」

と、叩きつけていった。

「お」

娘の、黒い、大きい瞳が、きらりと光つて、しなやかなからだ、舞うように沈んで、

「ええいッ」

「ちッ、や、やりおつたなッ」

男の upper body が、がくつと前に折れ、たたつと二、三步退つて、どたりと、下に崩れた。

「小癪な！」

「これを、くらえ！」

二人が、左右から、同時に斬りつけた。

娘のからだは、燕のように素早く右へ飛んで、右の男の手首を切つたらしい。

「わッ」